

書評

君塚直隆 著

『ヨーロッパ近代史』

(ちくま書房、二〇一九年)

青木 康

イギリスを中心にヨーロッパの近現代政治史、特に国際政治史の分野において既に数多くの著作のある著者が、二〇一九年一月に発表された新書判の『ヨーロッパ近代史』¹の概説書『ヨーロッパ近代史』が、本書評の対象である。本書では、ルネサンス期からロシア革命期にまでいたるヨーロッパ近代史を、「はじめに」と「おわりに」に挟まれたおおよそ時代順の八つの章に分けて論じているが、本書の特徴は、ヨーロッパの近代を「宗教と科学の相克」という視点から眺めようとし、各章ごとに、その時代の精神を表す人物を主人公に設定して、その人物史を通じて各時代を描くという叙述方法をとっている点にある。

まず、目次から、本書が描くヨーロッパ近代史の大枠を

確認したい。なお、章のタイトルに続く「」で、各章の主人公とされた人物を紹介しておく。

目次

はじめに 「ヨーロッパ」とはなにか

第1章 ルネサンスの誕生 【ダ・ヴィンチ】

第2章 宗教改革の衝撃 【ルター】

第3章 近代科学の誕生 【ガリレイ】

第4章 市民革命のさきがけ 【ロック】

第5章 啓蒙主義の時代 【ヴォルテール】

第6章 革命の時代 【ゲート】

第7章 人類は進化する？ 【ダーウィン】

第8章 ヨーロッパの時代の終焉 【レーニン】

おわりに ヨーロッパ近代とはなんであったのか

以上のような章のタイトルに加えて、時代順の八つの章の小見出しに登場する歴史用語（固有名詞を含む）のいくつかを挙げてみることで、著者が本書で読者に伝えようとするヨーロッパ近代史の要点は、よりいっそう明らかになるであろう。

第1章 フィレンツェ、北西部ヨーロッパ、近代外交、

大航海時代、軍事革命

第2章 キリスト教世界、贖宥状、カール五世、プロテ

スタント

第3章 望遠鏡、宗教裁判、ウルバヌス八世、三十年戦

争、科学革命、バロック

第4章 清教徒革命、ジェントルマン、アシュリー卿、オ

ランダ、宗教的寛容、名誉革命

第5章 ルイ一四世、ユグノー、ロンドン、フリードリ

ヒ(大王)、百科全書、カラス事件

第6章 市民革命、疾風怒濤、フランス革命、ナポレオ

ン、経験主義、ウィーン体制、メッテルニヒ

第7章 産業革命、自然科学、ビーグル(号)、『種の起

起源』、自助

第8章 日露戦争、血の日曜日事件、帝国主義戦争、総

力戦、二月革命、十月革命、内戦

もうひとつ、本書の描くヨーロッパ近代史の大枠を知るための試みとして、各章の冒頭に掲げられている関連年表によって、各章が扱っている時代の上限と下限の年を確認しておこう。

第1章 一四一五～一五一九

第2章 一四八三～一五五九

第3章 一五六二～一六四九

第4章 一六三二～一七一四

第5章 一六八五～一七九三

第6章 一七四〇～一八四八

第7章 一七六〇～一八八四

第8章 一八五四～一九二四

各章が扱う時代の上限または下限の年としては、章の主人公の生年または没年が使われていることが少なくないで、一般的に歴史年表で時代を分ける重要な事件が起こった年とされているものとはずれている場合も多い。それでも、上述のような各章の上下限の年号を見ると、第1章がルネサンス、第2章が宗教改革、第4章がイギリス議会議治の確立、第5章が啓蒙主義、第6章がフランス革命とヨーロッパ列強の勢力再編、といったように、特徴的な主題をもった、それなりに説得的な章立て²時代区分が提示されているように思われる。

本書評ではここまで、本書の各章のタイトル、各章の主人公、各章の小見出しに使われている歴史用語、さらに、各章が扱っている時代の上下限の年代などを見ることにより、本書が提示しようとしているヨーロッパ近代史像の大意を知ろうと努めてきた。そこからもうかがわれるように、本書は総じてヨーロッパ近代史についてバランスがとれた、安定した概説的な説明を(本文記述のみならず、各章冒頭二ページ半の概観と、年表²における説明記載を含め

て）分かりやすい形で提供しようと感じられる。

ただし、「主要参考文献」にも表れているように、近年の研究も参照しつつ、空間的にも時間的にもきわめて広大なヨーロッパ近代の歴史を平易に描き出そうとする本書のような取組みにおいては、ごく詳細に見ていけば、学術的に気になる個所がまったくないというようなことは、望みがたいことであるのかもしれない。専門分野の関係からイギリス政治史の範囲で評者が気付くことができた細かい問題の例をひとつ挙げるとすると、本書「第4章 市民革命のさきがけ」の関連年表の一六四二年の欄に、「イングランドで清教徒革命（三王国戦争）始まる（一四九九年）」との記載があった。一六四〇年代のイングランドで起こった革命については、一六四〇年から六〇年までのイギリス革命という異なる理解もありうるが、それはともかく、清教徒革命と三王国戦争をこのような形で併記することは、より重大な問題であろう。三王国戦争という見方は、従来はイングランド一国的に見られがちであった一六四〇年代の大争乱について、イングランドに加えてスコットランド、アイルランドという三王国で相互に関連しつつ起こったものの一部ととらえようとするもので、その発端は一六三〇年代末のスコットランドに求められる。その終りの年代についても、当然一六四九年ということはありません、クロム

ウェルらのアイルランドとスコットランドへの遠征にほぼ決着がついた一六五一年となるべきであろう。ヨーロッパ近代史としても重大な見方の転換が生じつつある問題にかかわっているにもかかわらず、三王国戦争という新しい用語だけは出して、一六四二年に始まる（四九九年まで）としておくことは、概説書の（年表の）中での簡略化された記載だと言って許容すべきではないように思われる。

しかし、本書評の第一の役割は、このような学術的正確さにかかわる問題が見られる箇所を他にも探し出し、あげつらうことにあるのではないであろう。そうではなく、著者が採用した、各時代を代表するような人物を登場させるという方法が、大きくヨーロッパ近代史をとらえて描き出す方法として成功しているか、そして、著者が「はじめに」で本書の視点として挙げている「宗教と科学の相克」という見方が、有効に働いているかを点検することが、評者には何よりも求められていると考えられる。そこで、この問題の点検に移ることにしよう。

まず、高校の世界史教科書でも必ず登場するような、多くの読者にとっても身近な人物を各章の主人公として次々に用いた著者の手法の成否について考えてみたい。これについて評者は、読者の知的な興味も刺激して、各時代の歴史の流れについての理解が進むことに間違いなく貢献して

いると、肯定的な回答を出したいと思う。

各章の主人公として取り上げられた人物の大半は、「宗教と科学の相克」という著者が掲げる本書の視点に影響されて、仮に歴史の領域・分野を政治、経済、社会、文化に分けて考えたとするならば、一般に文化の領域に分類される人びとである^③。しかしながら、第1章のダ・ヴィンチがルネサンス期のイタリアの「外交」で活躍した、第3章のガリレオの地動説裁判の背景に、三十年戦争などのようなヨーロッパを分断するカトリック・プロテスタントの対立局面が見られた、第6章のゲーテがドイツの一領邦ヴァイマルの指導的政治家としてフランス革命に向き合ったといったあたりの記述など、文化のみならず政治や社会の領域の重大事件も、文化人を主人公にすることによって、政治や社会それ自体にフォーカスした記述よりも面白く、よりよく理解できる面があったように感じられる場合も少なくなかった。

それでは次に、著者が掲げた「科学と宗教の相克」という視点は、本書において有効に活かされていると言えるであろうか。評者は、前段で述べたように、自ら掲げたテーマにかかわると思われる文化人を各章の主人公にすえるという著者の手法は積極的に評価したいと考えるものの、「科学と宗教の相克」という視点が十分有効に活かされている

かどうか、すなわち著者の視座の設定が成功しているかどうかという点については、残念ながら否定的である。むしろ、科学、宗教、さらに相克といった語で何を意味するかによって話はずいぶん変わってくるが、それらの語をごく普通に使うならば、それぞれの章に書かれていることを、「科学と宗教の相克^④」という視点から大きくまとめて理解することができそうな章は、ガリレオの第3章「近代科学の誕生」と、ダーウインの第7章「人類は進化する？」という二つの章に限られているように思われる。「おわりに」を含めてそれ以外の諸章では、著者による記述が拡散してしまったり、別の視点・問題関心の方がむしろ強く出るようになってしまったりしたことで、各章に書かれている内容、つまりは各時期のヨーロッパの歴史の流れを「科学と宗教の相克」という視点で整理・理解することが、うまくできそうにはないのである。

他方、著者の視点がよく活きている、その意味で統一性のある記述がなされている第3章、第7章についても、それぞれの時期のヨーロッパ史を正確に描き出そうとするのであれば、「科学と宗教の相克」とは別の問題にももう少し丁寧に触れられるべきであったのではないかという不満が残った。評者の私見では、一六世紀後半から一七世紀前半を扱う第3章については、大航海時代の経済活動の拡大

傾向が頓挫して生じた「一七世紀ヨーロッパの全般的危機」と呼ばれる問題を軽視したままで、この時代をただ「近代科学の誕生」の時代と特徴づけるのでは不十分なように思われる。同じように、基本的に一九世紀前・中期を論じる第7章については、同世紀半ばにバクス・ブリタニカ（イギリスによる平和）の世界が確立する過程がより具体的に明らかにされることなく、人類の進化をめぐる議論が強調されるのでは、やはりヨーロッパの歴史としては不足と感じられた。

著者がヨーロッパ近代史を大きく「科学と宗教の相克」というひとつの視点で書くという構想をもち、それに取組んだ点は積極的に評価したい。しかし、前の二段落で述べたように、その取組みは、少なくとも本書においては十分に成功していないように思われる。評者としては、著者が今後この構想をどのように修正してヨーロッパ近代史を再度描かれるのかを楽しみに待ちたいが、ここでは、評者が本書の「はじめに」の記述からも学んだ結果として、ヨーロッパの人びとが自分たちのことを「ヨーロッパ」として強く意識するようになり、そうであることに段々と自信を深めていく過程がヨーロッパ近代であったという文化史的な視点が有効なのではないかという感想をもったことをぜひ書き残しておきたい。

最後にもう一点、望蜀のそしりを免れないかもしれない

が、ヨーロッパの歴史にかかわる限りにおいて、ヨーロッパ外の出来事についてももう少し書かれていればよかったというのが、評者の感想である。言うまでもなく、ヨーロッパ史の叙述において、ヨーロッパ外のことをどれだけ書くかというのは難しい問題であり、正解はないのかもしれない。ただ、本書が描き出す一五世紀から二〇世紀初頭のヨーロッパ史のもっとも重要な特徴のひとつが、ヨーロッパ諸国の海外進出であることは動かしがたい事実である。また、ヨーロッパ外の世界のなかでも、北アメリカ／アメリカ合衆国は、ヨーロッパ諸国の植民地から出発したものの、一九世紀半ば以降は、相当程度までヨーロッパの国ぐにと一体となつて「西洋諸国」としてアジアの国ぐにに対する存在となつたという意味で、特別な意味をもっている。こうした点を重く見たとき、ヨーロッパ外の出来事について本書よりも積極的に叙述するという選択肢もあつたのではないかと考えられる。

書評の役割として、あえてネガティブなコメントが多くなつたが、著者にはご寛恕をお願いしたい。興味深く、また示唆に富んだヨーロッパ近代史の叙述を提供された著者に感謝して、本稿を閉じることとしたい。

註

(1) ここでいう近代は、高校世界史教科書の時代区分においては、近世・近代ということが多くなっている。また、本書では、ヨーロッパ近代史の終点はロシア革命期に置かれているが、教科書などではロシア革命は現代の章で扱われることが一般的である。本書はちくま新書の一冊として刊行されているが、ちくま新書では、本書にすぐ続いて二〇一九年四月に、第二次世界大戦以降の時期を主たる対象とする松尾秀哉『ヨーロッパ現代史』も刊行されている。本書で一九世紀末からロシア革命期を扱った第8章が、先行する他の七つの章とは少し趣を異にするように感じられる点も考えあわせると、うがちすぎの見方であるかもしれないが、著者が本書でロシア革命期を含む比較的長い近代の時期設定を採用するにあたっては、同じ新書のヨーロッパ現代史の対象時期との接続ということも意識したのではないかとも感じた。

(2) 本書は、後にやや詳しく論及するように、主として文化面で著名な人物を章ごとの主人公として叙述を進めるという特徴的な方法をとっているので、各章の概観とともに、年表による重要事項の提示が本文叙述を補うものとして特に重要な意味をもつと考えられる。

(3) 第8章のレーニンのは、確かに文筆家という面も有しているが、他章で主人公とされた人物からすると異質性が高いように感じられる。著者は、レーニンは西欧人ではないという意味で、他の章の人物と異なると書いている(本書、二二ページ)が、レーニンの異質性は、それにとどまらないであろう。

(4) 著者は「はじめに」で、「この『宗教と科学』が複雑に絡み合いながら、そのダイナミズムを前進させる『両輪』のように手をたずさえていたといえる」(本書、二二ページ)と述べており、「相克」を通常の「争い」とはかなり異なる、「協働」のような意味で用いようとしているふしがある。

(本学グローバル・リベラルアーツ・
プログラム運営センター・特任教授)